
君と僕はエゴイスト

千葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君と僕はエゴイスト

【Nコード】

N4307T

【作者名】

千葉

【あらすじ】

きみもぼくもエゴイスト

「例えば私は」君にとって一番大切なものは何か？」と問われたら、おそらく”自分だ”と答えるだろう。私の答えを聞いてあるひとは”なんて奴だ”と思うだろうし、あるひとは”もっともだ”と思う。この答えが正しいかどうかは別として、それが私にとっての答えとなるわけだ。」

「私はどうせいつか死んでしまうというのなら、大切なひとの手で殺されたいと思うのだよ。しかしその際ひとつの疑問が浮上するんだ。だって私にとって一番大切なものは自分自身なのだから、大切なひとというのも自分自身ということになるわけだろう。けれど私は自殺なんて情けないことはごめんだ。だから、自分と同等かその次くらいに大切なひとにその手を汚して欲しいという、我儘な人間なわけだよ。私は。」

「ここでひとつ君に質問だ。もしも私の大切なひとが君だとしたら、君は私のことを殺してくれるか？」

「その思いはお前の一方通行か？それとも相互の感情か？」
「相互ということにした方が分かりやすいかな。」

彼はソファに身を沈め、私の顔を上目遣いに見上げながらまずそう問うた。

私が返答すると、瞳を伏せ、しばらく思案顔になる。
数秒の後、彼は視線を再び私へ向けた。

「殺さないな。」

私は彼の瞳に浮かぶ色を注意深く探りながら、その眼をじっと見つめ返した。

漆黒のそれは、揺れることなく私を映している。

「それは何故？」

「大切なひとを殺すことなんて出来ないし、もし殺してしまったら生きてなんていけない。」

彼はゆっくりとそう言った。

静かな彼の瞳には、真剣な表情をした私の顔がはっきりと映っていた。

「ただ…。」

彼は再び口を開いたが、途中まで言葉を紡いで止めた。
逡巡するように一瞬瞳を逸らし、すぐにまた私を見る。

「お前が俺のことを殺してくれるんだったら、殺してやってもいいけどな。」

私は思わず驚いて眼を丸くした。

しかしすぐに彼の瞳に浮かんだ悪戯心を見つける。

「馬鹿だな。私が君のことを殺してしまったら、君は私のことを殺せないじゃないか。」

「そりゃそうだ。」

口の片端を吊り上げながらそう返せば、彼も小さな笑みを浮かべた。

その表情のまま彼はまた真っ直ぐに私の眼を捉え、告げる。

「お前の言ってることは全部エゴだ。無意味で理不尽で自己中心的。」

「そんなにはつきり言わなくても。自覚してるけどさ。」

彼の無遠慮な物言いに私は苦笑する。

私の表情を見ていた彼は、笑みを深くして言った。

「お前が本当に望むんなら、殺してやってもいいけど。」

「いいよ。まだいい。ていうか第一君は私の大切なひとじゃないよ。」

私が言葉を返すと、彼はさらに笑みを深くした。

漆黒の瞳は楽しげに揺らいでいた。

「見栄張らなくなつていいのに。」

「張つてないよ。自意識過剰。」

「はは、きつついなあ。」

そういつて笑う彼の声は私の救いになっているし、

そういつて微笑むその顔は紛れもなく私の大切なものなのだろう。

ただ、それを知っているのは私だけでいい。

仮定の影に逃げ込んで自衛を計る。

これもまた、私のエゴなのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4307t/>

君と僕はエゴイスト

2011年10月7日23時32分発行